チュートリアル報告Ⅱ

和田圭弘（言語社会研究科博士後期課程）

はじめに

以下に記すのは 09 年度前期開講の「ドイツ語圏思想」に付随しておこなわれたレポート指導チュートリアルについての報告である。任じられた TA は 2 名で、報告者はそのうちの 1 名にあたる。報告者にとって初めての TA 経験であり、学んだことも反省すべきことも多い。以下では、①チュートリアル開始前の印象、②チュートリアル期間中の詳細、③チュートリアルの反省点、④総括という順で報告をする。なお、本報告はチュートリアル終了時から数カ月後の時点で執筆されているため、細部に多少の記憶違いなどがあるかもしれない。ご寛恕を願う。

1　チュートリアル開始前――「ドイツ語圏思想」TAに求められた役割

授業の開講前に、藤野先生・前任者 2 名・後任者 2 名で引継ぎをおこなった。引継ぎ前の時点では、大学の友人や先輩の話から思い描いていた報告者の TA 像は、教員が授業で配布するレジュメや資料をプリントしたり配布したりするのが主な役割、というものだった。ところが「ドイツ語圏思想」の TA はそのようなものではなかった。数年前からおこなわれている「講義＝演習型授業の創出」なる教育プロジェクトの一環であり、受講生のレポート執筆の支援をする役割だと知らされ、TA に用意された多様な仕事にたいし報告者が乏しい情報しか持っていなかったことを知った。

TA 像が新しくなると同時に、ひとつ不安に感じたことがあった。哲学の学生でもなければドイツ語の学生でもない報告者が、ドイツ語圏思想という授業のレポート執筆を適切に支援できるだろうかという不安である。もちろんレポートのテーマや内容面での指導は藤野先生のお仕事であり、TA のサポートはレポート執筆という作業の進め方やレポートの形式・作法などが主となる（と、報告者は理解した）のだったが、この不安というか頼りないような感じはチュートリアルの最後まで尾を引き、チュートリアルを終えても解消されずに何となく残っている。

その他、引継ぎでは、チュートリアルへの参加が受講生の任意であること、チュートリアルは2、3週ごとに1回で学期中に全5回、本体の講義とは別途教室に集まっておこなうこと、2名のTAが参加希望者を分担して受け持つこと、これまでのチュートリアルではTAと参加者間のメールによるやり取りが有効であったことなどを説明していただいた。参考資料としてプロジェクトの07年度と08年度の報告書を受け取り、また、藤野先生ご推薦の「論文の書き方本」を教えていただいた（戸田山和久『論文の教室　レポートから卒論まで』日本放送出版協会、2002）。総じて丁寧に引継ぎをしていただいた。

2　チュートリアル開始

「ドイツ語圏思想」開講後、受講生からチュートリアル参加者を募り、もう1人のTAである山内さんと半々に学生を分担してクラス編成をした。結果、報告者は11名の学生を受け持つことになった。全員が一堂に集まれる日時は設定できなかったので月曜日5限のクラスと火曜日5限の2クラスに分け、連絡用メーリング・リストは全体でひとつにした。参加（希望）者の内訳は以下のとおりである。

社会学部1年生：4名

社会学部2年生：1名

経済学部2年生：2名

法学部2年生：1名

法学部3年生：1名

社会学部4年生：1名

＊所属・学年不明の学生：1名（参加を希望していたが、その後音沙汰なし。）

学部別では社会学部6名・経済学部2名・法学部2名、学年別では1年生4名・2年生4名・3年生1名・4年生1名であった。名簿の登録上は11名だが、5回のチュートリアルに全員が出席していたのではない。チュートリアルの2、3回目くらいで、社会学部1年生2名・社会学部2年生1名・経済学部2年生1名・法学部2年生1名の5名という「いつもの」メンバーが定まっていった。（月曜クラス1名・火曜クラス4名。）

クラス編成時の顔合わせの際に、大学で初めてレポートを書くことになる1年生はもちろん、2年生以上でも誰かに習ったのではない自己流のレポートの書き方に不安を持っていることが分かった。そこで、全5回のチュートリアルのうち4回をレクチャー形式によるレポートの書き方解説にあて、5回目にゼミのように各自がレポートの進捗状況を報告

することを目指して運営していく方針とした。みんなで集まるときはレクチャー形式に比重を置きつつ、個別の執筆相談には各自のペースに合わせて臨機応変に対応するというやり方だった。

4 回にわたる解説では藤野先生ご推薦の上記の本 1 冊のみを参考文献とした。参考文献が多岐にわたると、文献間の差異によってこちらの説明にもブレが生じてしまいそうだと考えたためである。その本に従ってとにかくひとつのやり方に馴染んでもらうことを目的とした。かくいう報告者も、レポートや論文の書き方それ自体を習ったことがなければ教本を読んだこともなかったので、自分の執筆作業を反省的にふり返るきっかけとなりとても勉強になった。回ごとに参考文献の該当箇所をまとめたレジュメや資料を作成し配布した。

以下、全 5 回のチュートリアルの概要を示す。

第 1 回　5 月 18 日（月）・19 日（火）

初回はまずチュートリアルの目的と進め方について簡単に説明したのち、論文の基本的性格（論文には問いと主張と論証がある）と論文の構成要素（タイトル・著者名・著者の所属機関／アブストラクト／本体／まとめ／注、引用・参考文献一覧）について、次いで文献検索と入手の主な手段について説明した。08 年度報告書でも書かれていたが（p. 101）、NACSIS Webcat や国会図書館は存在を知らない学生もいた。最後に、まずはレポートのテーマをできるだけ早い段階で見つけることが重要だと強調した。

第 2 回　6 月 1 日（月）・2 日（火）

この回でのテーマは論文のアウトライン作成とパラグラフ・ライティングとした。箇条書きのアウトラインを書くことから出発し、それらをトピック・センテンスを持つパラグラフへと膨らませていくことで論文を成長させていくやり方について説明した。

第 3 回　6 月 15 日（月）・16 日（火）

この回では論証をテーマとし、論文を説得的なものとするためにはどのような論証をしたらよいのかを説明した。この回くらいから参加者が固定していった。

第 4 回　6 月 29 日（月）、30 日（火）

第 4 回で解説を主とするチュートリアルは最終回とした。ここでは注の付け方・引用の仕方・参考文献の示し方といった細かな作法について説明した。

第 5 回　7 月 13 日（月）、21 日（火）

みんなで集まるチュートリアルとしては最終回で、各自の進捗状況報告とそれついての出席者による質疑応答が目標だったが、文章を用意したうえで報告をできたのは 2 名だった。（社会学部２年生と法学部２年生。ちなみに他は社会学部１年生２名と経済学部２年生１名。）他の学生は、アウトラインの作成中であるか、まだテーマが決まっていない状態であった。最終回以降の執筆相談は個別にメールないし面談で応じると伝え、実際に数名の学生とやり取りがあった。

こうして第 4 回までのチュートリアルは TA による論文のイロハを解説することに時間を割いた。すると、質疑応答の際に、他の授業で準備しているレポートの書き方について質問を受けたことが一度ならずあり、「ドイツ語圏思想」の枠を越えてチュートリアルを利用してもらえているようだった。

執筆作業は学生のペースに任せ、期日を設けて課題を出すことはしなかった。早期のテーマ設定・執筆開始を毎回のチュートリアルで促し、何か文章が書けたらいつでも提出してくれるように伝えていたところ、3 名の学生がチュートリアル時にプリントアウトした文章を提出してコメントを希望してきた。（後日 TA からコメントを返した。）メールでの相談がはじめて来たのは 6 月初頭で、その後、8 月 18 日のレポート提出まで数人の学生から数度メールでの相談があった。内容はテーマやアウトラインやレポートの本文にコメントを求めるもの、引用の仕方についての質問などであり、その都度質問に答えたり文章の添削をしたりした。5 回のチュートリアルに出席しなくてもメールその他で相談を受けると最初に伝えておいたのだが、メールで相談をしてきた学生は 5 回のチュートリアルにいつも出席していた学生とほぼ同じであった。結果的に、毎回チュートリアルに出席していた学生がメールでの相談も利用したのだった。

3　反省点

チュートリアルを終えての反省点をいくつかあげていきたい。

参加者に課題を与えるべきか？

上述のように、期日を設けて課題を出すことはしなかった。折に触れ計画的な執筆を促すのみに留めた。4 回のチュートリアルに参加しながら各自が自分のペースで作業を進めつつ、

必要に応じて相談をしてもらい、5回目には何かしらの報告ができるようになっているというのが、報告者が当初思い描いていたイメージである。4回のチュートリアルは、そこで解説する内容をその都度参加者が実践していけば、それなりのペースで執筆作業が進められるように構成をしたつもりだった。しかし5回目に報告の準備ができたのは2人の2年生だけだった。特に1年生にとっては、執筆相談は折に触れしてくれており1人はテーマも早い段階から決めていたものの、執筆経験のなさなどもあるためか、文章を準備して報告をするのは難しい部分があったかもしれない。

そのため、TAがアウトライン作成などの課題を出してその提出期限を設定することで、執筆のリズムを作るペースメーカー役になったほうがよかったかもしれないということが考えられる。課題提出→TAのコメント→それをフィードバックして再び課題提出…とリズミカルに繰り返すことになるので、文章を書く訓練の機会も増える。これは、2人の2年生にとってもさらに質の高いレポートを書く助けになりえたかもしれない。

参加者はチュートリアルの進行とは必ずしも重ならない各自のリズムで執筆相談をしてくれた。早くからアウトラインへのコメントを求めてきた学生もいれば、8月に入ってからペースを上げて繰り返し原稿を送ってきた学生もいた。自主的にTAを活用してくれて、これはこれでよかったと思う。他方、ある程度TAが先導するというのもひとつのやり方であっただろう。チュートリアルでTAがどこまで学生に負荷をかけるべきなのかが反省点として残った。

インプットとアウトプットのバランスとタイミングをどうするか？

上記と関連して、チュートリアルでインプットとアウトプットのどちらにどれだけ比重を置くかということも課題として残った。

今回のチュートリアルではTAがレポートの書き方を解説する時間に多くを割き、参加者各自が準備した文章をみんなで発表する機会は一度のみだった。インプットの側面は、恒常的に参加していた5名からはおおむね好評だったという手応えがある。他の授業のレポートの書き方について質問があったときなどにそれを感じた。他方、ある学生（社会学部1年生）は、参考文献を入手して読んだので、レクチャー形式のほうには参加しないと伝えてきた。その後メールでの相談を一度してくれたものの、この学生のニーズに報告者のやり方はあっていなかったのだろう。

ではアウトプットを増やすことについてはどういうことがいえるだろう。それはチュートリアルの各回で学生からの報告の機会を増やすことになる。「講義＝演習連結型授業の

創出」という本プロジェクトの目的からすると、こちらのほうが本来の姿であるのかもしれない。これには少なくともふたつのことを伴うと考えられる。ひとつはTAが課題を出すこと。（いつまでにこのことをやってきてください、と。）もうひとつは、本体の講義の開講期間途中でその課題を出していくことである。テーマを選択してレポートを執筆する作業は講義で得る知識や疑問がもとになるだろうから、講義の進行と関わっているだろう。しかし講義の全過程が終わるのを待ってTAが課題を出すのでは遅すぎる。だからチュートリアルでは学期の半ばからレポート執筆のための課題を出すことになるが、それだと講義後半の内容がレポートにフィードバックされなくなるかもしれない。すでに大学での蓄積がある2年生以上はよいかもしれないが、1年生にはやや酷な面もあるだろう。（実際、なかなかテーマを決められなかった1年生がいた。）課題を出すこと自体も、講義の半ばからそれをしていくことも、学生にとってやはり負担が大きくなるのではないかと想像する。

個々の学生の条件に即しつつインプットとアウトプットのバランスをどう取るべきかが、ふたつ目の反省点である。

TAの適任者

準備段階についての報告でも述べたが、チュートリアルの過程では、やはり哲学や哲学史の一般的（であろう）知識や、参考文献に言及する機会がやってきた。内容面については藤野先生に積極的に相談するようと伝えていたが、文章の添削をしていればTA側にもある程度の知識が必要なのはもちろんであるし、学生のほうでも身近にいるTAに内容面でのサポートを暗黙のうちに求めているという印象を受けた。求められれば応えてやりたいのが心情である。だが、努力はしてみたものの、非専門家である報告者の知識と能力でそれがどこまでできたのかは自分としては疑問が残る。TA側の質の保証という問題である。（ドイツ）哲学を専門とする大学院生がチュートリアルをした場合の成果を考えずにはいられない。

4　総括

当初の参加希望者は11名で、回を経て恒常的な出席者は5名となり、うち4名がレポートを提出した。残念ながら1人は提出できなかったようだ。参加を希望しながら多忙のためなかなかチュートリアルに出席できないという学生がいて（社会学部4年生）、ついにメールでの相談も来なかったが、レポートは無事に提出したようだった。チュートリアルの概

要を知って出席しないことをあらかじめ伝えてきた上記学生も、論文を提出したようだった。チュートリアルに出席しつつレポートを提出した学生は 4 名だが、前任者の方々と比べると、これは人数としては少ない成果だろう。そもそもチュートリアルへの出席者自体が少なかった。報告者のチュートリアルが魅力的でなかった学生に対しては申し訳ない気持ちだし、努力して結果を出された前任者の方々に比べ報告者の力が不足していたことに悔やまれる思いがする。

とはいえ、明るい話題がまったくないわけではなかったので、それについても述べておきたい。1 人の学生はチュートリアルの初期からたいへん熱心だった。毎回のチュートリアルに出席し、そのたびに執筆について TA に相談し、メールを利用して添付ファイルで文章の添削も数度おこない、別に面談の時間を設けたこともあった。本を貸したこともあった。学生がレポート執筆という目標に向けて成長していく過程に間近で携われたことは大きな楽しみと喜びを与えてくれた。また、フランス現代思想をレポートの題材とした別の学生は、ドイツ語圏思想という授業なのにフランス現代思想がテーマで大丈夫だろうかと率直な不安を相談してくれた。（レポートは完全に自由テーマだったので、問題ないと答えた。）TA が身近な相談役になっていたのであれば、これも喜ばしいことこの上ない。

最後に、本プロジェクト全体について僭越ながら意見を述べたい。

まず、本プロジェクトの目的のひとつである学士教育課程の充実についてだが、学部生にとって、身近な勉強の相談役としての TA の存在は有用だろう。今回のチュートリアルを通して、数名の学生の反応からそれを実感することができた。最初に述べたように、報告者は（また報告者の周辺の友人も）TA が教員の事務の補佐役程度のことを担う役割だというイメージを持っていたのだが、本プロジェクトのような学部生の学習により深く関係する TA の存在が増えていくことは、学士課程教育の充実にとって欠かせないことだと思う。また、教務その他が多忙化している教員にとって、学部生の教育の一部を TA が担うことは多少の負担軽減となるのではないだろうか。それによって教育における教員本来のパフォーマンスが回復・向上し、学士教育課程のさらなる充実につながることもあるのではないかと想像するのだが、どうだろうか。

本プロジェクトのもうひとつの目的である博士課程学生・PD への支援という点でも大きな価値があると思う。教歴にもなり、さらに金銭面でも補助となってくれるのであればありがたいことである。他研究科と比べて言語社会研究科は TA・RA などの制度が不十分であるように思うのだが、実態はどうだろうか。いずれにせよ、当事者としては制度のさらなる充実を願う。また何より、TA となる大学院生にとって、学部生へのチュートリア

ルから得られるさまざまなフィードバックはとても大きい。自分の知識と能力が学部生への教育によって洗いざらい点検されている思いである。学部生との交流がTAに大きな教育的効果をもたらしてくれることを、喜びと緊張とともに実感した。

今回のチュートリアルでは非常に有意義な経験をさせていただき、終えてから考える部分は（特に反省点だが）とても大きかった。この機会を与えてくださった藤野先生および報告者を後任として推薦してくださった前任者の先輩に、また報告者のチュートリアルに参加してくれた学生に謝辞を申し上げて、報告の結びとしたい。

和田圭弘（わだ・よしひろ）
言語社会研究科博士後期課程２年
専門分野：比較文学
論文「金石範の文学論について 1963 年から 1972 年まで」（言語社会研究科紀要『言語社会』第３号、2008）など